

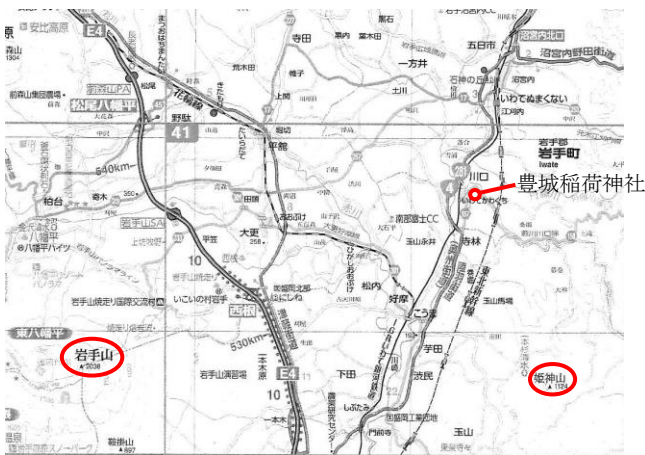
岩手県岩手郡岩手町の豊城稲荷神社の鉄門海碑に関する調査報告書

(2021年9月30日作成)

中村安宏(岩手大学人文社会科学部教授)

鹿野朱里(八幡平市立松尾中学校・盛岡市立玉山中学校非常勤講師)

- 1、調査日:2021年9月22日
- 2、住所:岩手県岩手郡岩手町川口第15地割162-2(地図参照)
- 3、場所:豊城稲荷神社(右の写真の奥)の左脇の丘の上の塚



(『県別マップル3 岩手県道路地図』昭文社、2021年より)



4、調査結果

- (1) 鳥居(上の写真の左)
- (2) 塚(左の写真の鳥居から登っていったところ)



額には「金毘羅様」とある

(3) 塚の上
左側の石



横250cm×縦220cm×幅15cm
(文字はなし)

右側の折れた石碑



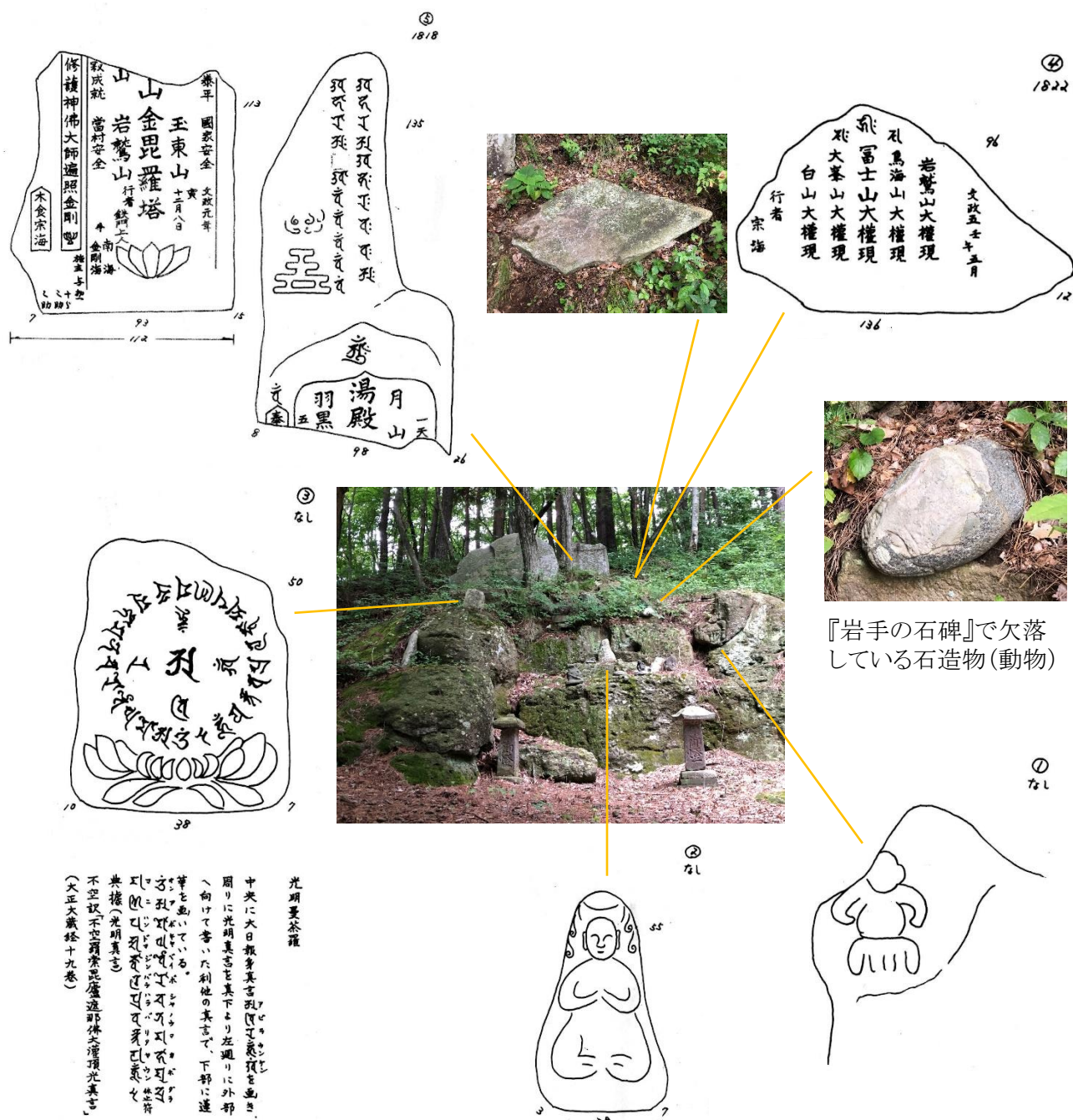
2つに折れているところを合わせてみると

一天泰平国家安全文政元年
月山 玉東山 寅十二月八日
湯殿山 金毘羅塔
羽黒山 岩鷲山 行者鉄門上人
五穀成就當村安全〔このあたり不明〕
奉修護神佛大師遍照金剛
木食宗海
となる。

注

- ・「玉東山」とは姫神山のこと。
- ・「岩鷲山」とは岩手山のこと。

なお、調査の後、岩手県の石碑(県北と県南以外)を丹念に書き写した臼澤正充『岩手の石碑』(2004年、岩手県立図書館所蔵)に当神社の石碑の図があることが分かった。ただし、塚の上の左側の石についての言及はなく、欠落している石造物(動物、石塔)もあり、また位置関係も不明である。臼澤氏が書き写した石造物とその位置関係を示したのが下図である。



塚の下石塔の文字は以下の通りである

左側	右側
(表面) 御燈	(表面) 御燈
(右面) 當村安全	(右面) 御武運長久
(左面) 国家安全	(左面) 五穀成就
(背面) (文字はなし)	(背面) (文字はなし)

注
 ・「南海」については「海向寺史料」(『酒田市史 史料篇第七集 生活文化篇』1977年、704～706頁、713頁)にその名が見える。
 ・「當村」とは川口村のこと。

(以上、中村・鹿野)

5、考察

岩手町の鉄門海碑(文政元・1818年12月8日)は、『岩手町史』(1976年、「第三編 教育と文化」「第三章 民間信仰」「第一節 岩手町内の石塔」の「岩手町内石塔一覧表」、786頁)の中に「鉄門上人」の名が見え、先述した『岩手の石碑』の図の中にも見えるものの、これまでの研究では、岩手県内の鉄門海関係の石碑は現在のところ、二戸市に3基(九戸城跡松ノ丸跡/文化9・1812年1月、武内神社/文化9年1月8日、愛宕神社)、山田町に1基(関口神社/文政3・1820年11月)があることが指摘されているだけで(山澤学「湯殿山木食行者鐵門海の活動形態－盛岡藩領を事例として－」『歴史人類』第43号、2015年、及び『神と呼ばれた木食行者 鐵門海』湯殿山注連寺、2019年、等参照)、ほとんど知られていなかった。

調査結果の通り、塚の上の右側の折れている石碑に「鉄門上人」の文字が刻まれている。

これを見ると、この地域では出羽三山に行けない人々が、姫神山を月山に、金毘羅塔を湯殿山に、岩手山を羽黒山に見立てて信仰していたと考えられる。

「金毘羅塔」に当たるものが何を指すのか。当該石碑の立地を考えると、川口の豊城稲荷神社の左手前に「金毘羅様」と書かれた鳥居があり、その鳥居から登っていった塚の上に当該石碑とその左側に石があり、そのほかの石造物もある。湯殿山とそれに見立てられた「金毘羅塔」というのは、塚の上の2つの石と関わりがあるのではないかと考える。鉄門上人本人が文政元年に現岩手町に来たかどうかは定かではないが、この塚はいわば「湯殿塚」とも言えるものであろう。

また、『岩手町史』(「第三編 教育と文化」「第三章 民間信仰」の「金毘羅」、798頁)には、「航海安全の神として広く信仰されている。岩手町に金毘羅の石塔が多いのはどうしてか明らかでない」と記されている。これに関して、出羽三山信仰の研究が専門の岩鼻通明氏のご教示によれば、最上川流域にも舟運安全の金毘羅信仰が広がっているということである。この豊城稲荷神社がある川口という場所は、北上川の上流域に当たっているため、まだ推測の範囲ではあるが、北上川との関係も考えられる。(以上、中村)

岩手県岩手郡岩手町の豊城稲荷神社の鉄門海碑に関する調査報告書

作成 中村安宏・鹿野朱里

掲載 [中村安宏研究室ホームページ](#)

発行 2021年9月30日

URL <https://jinsha.iwate-u.ac.jp/~yasuhiro/tetsumonkai.pdf>

